

# 古代史に遊ぼう

## 第52回 ー北九州周遊ー その3 玄界灘と響灘、宗像大社

八女の岩戸山古墳を見学の後、九州自動車道を北上、八幡の手前の鞍手ICで高速を降り、県道27号を北上、玄海国定公園の遠見の鼻(妙見崎)に近い「かんぼの宿北九州」にその日の宿をとった。新鮮な魚料理に舌鼓を打って満足する。宿からは海の眺望が素晴らしいが、さてその海の名は何かという議論になった。端的には、玄海灘かどうかという問題である。一般的には九州の北限の海は一括して「玄界灘」と呼ばれることが多い。しかし、関門海峡寄りの海域には別の名前があるのではないかと言う事、後日調べたところ「響灘」とあった。地図では関門海峡の北西に広がる海域、川尻岬から関門海峡西口を経て、宗像市の鐘ノ岬から大島にいたる海域を響灘としている。語源は万葉集(巻17)に「昨日こそ、船出はせしか鯨魚(いさな)取り、比治奇(ひぢき)の灘を今日見つるかも」に歌われている「ひぢきの灘」が長い年月を経て変わり「ひびき(響)灘」となったということである。このあたりは海藻ひぢきの名産地であったことから、その名がついたという。



●写真：響灘の朝

出発して西へ向かい、玄海灘にそそぐ釣川の左岸の森の中にある宗像大社辺津宮を目指す。宗像大社とはこの辺津宮のほか、11km沖の宗像大島にある中津宮、そしてそこから距離にして49km沖にある沖ノ島の沖津宮という三つの宮の総称である。辺津宮には市杵島姫神、宗像大島にある中津宮には湍津姫神、そして沖ノ島にある沖津宮には田心姫神を祀っている。この三神を「宗像三女神」といい、神話に登場する三女神は古来海人族の神であり、現在では海上交通の守り神・全国の宗像神社の総本社として崇敬を集めている。この三つの社の所在地を通る直線を引くと、ほぼ北西の方向を示し、対馬の北端をかすめて釜山に達する、即ち、季節を選んで工夫して大陸に渡る「海の道」を示している。

縄文海進の時代、海面は現在より数メートル高かった。従って当時九州北部の海岸線は現在の海岸の内側に大きな潟、内湾を作って、その内海や川を海人は丸木舟で行き来していた。糸島半島、博多湾から宗像、遠賀川流域を経て洞海湾から関門海峡まで内海を繋ぎ、瀬戸内海まで移動することが出来た。北九州の海が

冬場や荒天で漁が出来なくても、穏やかな潟や内海での素潜り漁や丸木舟を使った漁が可能であった。

辺津宮の地が古代に繁栄した理由は、この場所を通して北九州の東西へと船の通り道が続いていることが第一、それに交差した対馬から朝鮮半島に渡る「海の道」の出発点となっていることである。もう一つの理由は辺津宮の傍を流れる釣川が流れ込んでいる内海が瓢箪の口のように絞られているため、神社の脇の釣川では1日2



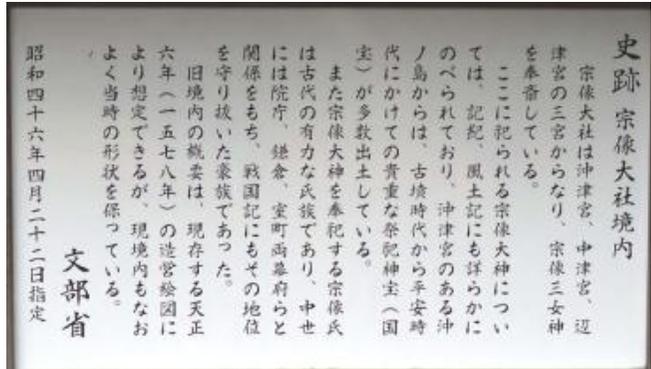
●写真：宗像大社

回潮の干満によって、上げ下げの流れが起こる現象があつた。このため、潮の具合で朝と晩に船を漕がずとも楽に集散出来る場所であり、近郷近在の人が集まって市を開きやすい場所となっていた。

宗像大神には「道主貴(みちぬしのむち)」の別称があり、それは「最高の道の神」を意味する。古くから海の民より航海安全の神として尊崇を受けてきたが、今日ではあらゆる交通と道の安全を願う参詣人が参拝に訪れている。福岡県内では宗像大社のステッカーを貼った車を多く見かけるが、交通安全のステッカーは宗像大社がはじまりであるという。宗像大神をお祀りする神社は、巖島神社、出雲大社・筑紫社、松尾大社、天河神社、竹生島神社、江島神社などの著名な神社を含め全国各地に約6千社以上あるとのことである。



●写真：高宮祭祀場



史跡 宗像大社境内

宗像大社は沖津宮、中津宮、辺津宮の三宮からなり、宗像三女神を奉斎している。

ここに祀られる宗像大神については、記紀、風土記にも詳らかにのべられており、沖津宮のある沖ノ島からは、古墳時代から平安時代にかけての貴重な祭祀神宝（国宝）が多数出土している。

また宗像大神を奉祀する宗像氏は古代の有力な氏族であり、中世には院作、鎌倉、室町、西幕府らと関係をもち、戦国記にもその地位を守り抜いた豪族であった。

旧境内の残基は、現存する天正六年（一五七八年）の造営絵図により想定できるが、現境内もなおよく当時の形状を保っている。

文部省

昭和四十六年四月二十二日指定

まず本殿に参拝し、それから側道に出て宗像大神降臨の地で古代祭祀の姿を今に伝えているという高宮祭祀場に詣でる。

古めかしい洋風建築の神宝館は必見の場所である。中世から活躍した宗像一族の蒐集した美術工芸品、宗像大宮司家伝来の宝物もさることながら、その目玉は「海の正倉院」と云われる、沖の島（沖津宮）の調査発掘出土品である。沖津宮は島自体がご神体で、女人禁制、男も齋戒沐浴してのち上陸が許される島である。4・5世紀から始まり、9世紀まで沖の島において大和朝廷の国家それらの祭祀が行われてきた。それに使用された古代の装飾品などの祭祀遺物が島に眠っているのである。現在まで1次から3次調査（1954～71年）が行われ、1962年（1・2次調査）と2003年（第3次調査）の二回にわたり、計8万点の発掘調査出土遺物が一括して国宝に指定された。それらは宝物館の2階に展示されている。2014年に出光美術館（東京）で開催された宗像大社国宝展－沖の島・沖の島と大社の神宝－は大人気を博した。

ブローグとして日本書記、神代卷（1817刊）、宗像三女神画賛（仙筆涯－江戸時代）、宗像三社縁起（貝原益軒著－1704）の由緒を示す資料から始まり、1）沖の島－岩上、岩陰遺跡の出土品 2）沖ノ島－半岩陰、半露天、露天遺跡の出土品 3）宗像大社文書－宗像大神宮家と中世の海外交渉 4）宗像大社と福岡藩の4部に分類展示された。第一部の鏡、玉・ガラス製品、装身具、武器・馬具などは主として古墳時代のもの、第二部では瓶・壺・円板・人形・器台・高坏など祭祀に使われた飛鳥・奈良・平安時代の出土品が展示されており、参考展示された浮出切子椀（カットグラス椀－岡山市立オリエント美術館）、三彩長頸瓶（東京国立博物館）の2点を除いて、他はすべて宗像大社の所蔵する国宝（一括指定）である。第三部の文書は源頼朝書状（1185）に始まり、阿弥陀經石拓本（2005）に至る21種の古文書が展示されており、うち60%強が国宝である。第4部は近世に福岡藩主より寄進された三十六歌仙図扁額、剣及び太刀の3点であった。

国道495号を南南西に玄海灘に沿って走り、新宮町で県道に入って、海ノ中道を経由し、志賀島を目指す。道路からは海は見えず期待の眺望は全く楽しめない、みえるのは砂留の柵ばかりである。途中、海の中道海浜公園があったがパスする。やがて志賀島に着く。ここで金印が見つかったという碑があるそうだが、車では簡単にわかりそうもないので、登り道に入り展望台を目指す。金印「漢委奴国王」という物証の出土により、ほとんどすべての研究者により奴国は「那の津」－福岡市西部、那珂川流域とされてきたが、魏志倭人伝を字句通りに、「金印の呪縛」とらわれず素直に読めばちょっと違うのではないかという説もある。志賀島は思ったより広い、曲がりくねった山道を相当走って、ようやく山頂に到達する。大木が生い茂り、山頂は森の中の窪地にいるような感じである。展望台上れば、玄界灘が見えるだろう登ろうかと迷っていると、公園職員のパトロールカーが来て、もう夕方だからやめた方が良くいと助言する。安全性に問題があるようなので、あきらめて帰ることにする。帰りの見どころの目玉は、福岡湾東部の奥に作られた埋立地と建設された大規模なモダンマンションの林立である。湾内に一大都市が出現しているが、台風が来たらどうなるのかなといささか気になることであった。博多駅前レンタカーを返却、駅の食堂街で軽く夕食を取り、土産を購入して新幹線で一路関西を目指して帰路に就いた。

写真をご提供頂いた吉本吉彦氏に感謝申し上げます。

（岡野 実）

- 文献 1) 古代史の謎は海路で解ける 長野政孝 PHP新書 (2015)  
2) ヤマタイと金印の呪縛 渡辺捷弘 私家版 (2017)